

## 祖父はなぜビルマの豎琴を愛したか

札幌校2年 原田 香里

図書館でこの本に出会った時、私は迷わずこの本を手にとった。生前祖父が私に勧めた本だったからである。後にも先にも祖父が私に勧めた本はこの一冊きりであったが、以前読んだ時はどうしてもこの本に共感することができなかった。そのことが納得できず、なぜ祖父の好きな本に共感できなかったのかずっと心に引っかかっていたのである。

私の祖父は第二次世界大戦でビルマ（現ミャンマー）に出兵し、そこで終戦を迎えた。そのときの体験を祖父は私に1度きりだが話してくれたことがあった。その話を聞いた後に読んだこの本からは、祖父が語ったような戦争の厳しさやつらさがほとんど感じられなかった。戦争の厳しさが伝わるような描写がないのである。それなのに、それを体験した祖父がなぜこの本に共感したのだろうかという疑問に思った。祖父が後世に残しかたったこと、伝えたかったのは自分が体験した戦争の惨劇の事実ではないのか。私はこの本をもう一度じっくり読み返したが、やはり祖父の語ったようなビルマ戦はそこになかった。しかし物語の中で水島が自分を殺し、ビルマ僧へ変わっていくにつれ、なぜ祖父がこの本を愛したかという私の疑問に対する答えが見えてきた。

1945年の夏を生き延びた人々によって、戦争は様々に語られる。祖母が広島県福山市の空に広がる原子爆弾の激しい光を見たとき、祖父はビルマの奥地で身を潜めていた。ビルマに来て4年目、あと数日で日本が降伏し、終戦を迎えることなど祖母も祖父も想像しなかった。ビルマの豎琴の世界はこの頃から終戦の頃を描いたものである。戦争を体験した人々の高齢化が進む中、その人々の語り記した記録が後世の平和主義を支える1つとなる。いずれ、戦争を体験した人々の話を直接聞くことができなくなる日が来るのである。そのような中、私たちは今ここにあるだけの「戦争を伝える資料」を駆使して後世に平和を伝えなければならない。それなのに『ビルマの豎琴』は平和資料館にあるような「真っ黒なお弁当」や「8時15分で止まった時計」、「石畳に焼き付けられた人の影」のようなメッセージ性がない。当時の私はこの本を読んでそのように感じたのである。

この物語の主人公である「うたう部隊」はビルマ戦中、自分たちの合唱に聞き入りながら、絵のような湖に向かってうれしそうに指揮棒を振る隊長の指揮に合わせて歌をうたう。そして故郷の家の人たちにもこの景色を見せてやりたいと心に思う。この部分で私は、竹山道雄は実際にビルマ戦を体験していないからこのように書けてしまうのだと感じた。戦禍の中で日本兵と敵が合唱を通じて和解するという設定上、敵は「はにゅうの宿」等の元は日本の歌ではない歌を共に歌えるイギリス兵でなければならなかった。そして、当時日本軍とイギリス軍が戦っていたビルマの土地はこの物語の舞台として一番都合が良かったのである。そのような点にも私はファンタジーとして戦争を扱う適当さを感じ『ビルマの豎琴』に反発していた。

この作品は終戦後1年をおき、児童向けの読み物をとの依頼により発表されたものである。終戦後の日本は戦争に反対し、兵士を悪者扱いすることが正義であり、それが平和を望む者の当然の考えとされてきた。そのような風潮の中で様々な検閲に耐え、時間をかけて発表されたのがこの作品である。戦記小説や問題提起小説の性格を持たず、そのような

作品とは一線を画す『ビルマの豎琴』の主題とは何であろうか。その答えはビルマ僧となった水島が静かに語っている。

終戦を迎えた直後、三角山にたてこもって今もなお日本の勝利を疑わない別の隊に対して水島は降服を進めるが失敗する。命からがら三角山を後にし、水島は傷ついた体を引きずるようにして自分の隊を目指す。原子爆弾で破壊された日本に帰り、皆で日本の再建に尽力するという誓いを守るために、水島はイギリス兵と日本兵の死体が幾重にも折り重なる山を、川を歩き続けた。そして足を止める。ビルマで命を落とした者をいったい誰が供養するのか。それは誰かに任せていいものなのか。日本兵水島としての足跡はここで消える。水島は待ち望んだ日本への帰国も、「うたう部隊」との誓いをも捨ててビルマ僧として戦没者の鎮魂に生涯を捧げることを決心する。

ビルマ僧となった水島上等兵は、戦没者の遺体を埋葬している最中、砂の中から大きなルビーを見つける。そしてこのルビーを見ているうちに、この宝石が死んだ人たちの魂であるように思えてくる。そしてこのルビーをビルマで命を落としたすべての人の遺霊と考えて、肌身離さずに持ち歩き、ただ一人の日本人として祈り続けた。ビルマ僧になりきれず、自分を完全に殺すことなくビルマ僧の振りをする生活がしばらく続く。

そしてある日完全に日本人、「うたう部隊」としての自分を捨て、ビルマ僧に生まれ変わる日が来た。水島はいつも持ち歩いていた、人々の遺慰であるルビーの安置場所を探し、臥仏像の胎内がいいと思い至った。臥仏像の足の裏には胎内に続く入口があり、そこからルビーと豎琴を抱えた水島は胎内に入った。そして思いがけなく外から聞こえてきた「うたう部隊」の合唱を聞く。思わず水島は豎琴を掻き鳴らす。その音を聞き付けて「うたう部隊」の隊員は胎内に続く扉を叩き「おーい、水島！」と叫ぶ。扉一枚をはさんで水島は拳を固めて震えていたのである。

水島の肩の上では、「うたう部隊」が飼っていたオウムが同じように「おーい、水島、一緒に帰ろう！」と鳴く。代わりに水島をビルマに残したまま日本へ向かう船の上では、水島が肩に乗せていたオウムが「ああ、やっぱり自分は帰るわけにはいかない！」と鳴く。水島が「うたう部隊」との思い出がつまった豎琴の音色と肩で鳴くオウムの声で「うたう部隊」の水島に戻らなかったのは、首から掛かったルビーが自分の役目を常に思い出させていたからであろう。逆に、この頃の水島はそのルビーの力を借りてビルマ僧を演じていたといえる。

水島は臥仏像の中で、「うたう部隊」との最後の別れというように合唱に合わせて豎琴を掻き鳴らした。それが終わり、からっぽだった臥仏像の胎内にルビーを置くことで水島は密かに臥仏像に命を与えた。水島が生み出した臥仏像の命とは、水島が生み出したビルマ僧の命である「鎮魂という役割」と同じである。ルビーを置き去ることで水島は世界から完全にいなくなり、ビルマ僧が生まれた。ビルマを見渡す臥仏像の中で水島は死んだのであるから、「うたう部隊」は水島という戦友をビルマに残してきたことになる。日本を捨ててまで戦争の為に死んだ人々の鎮魂に従事する。そのような内容の物語は当時の日本の風潮では受け入れ固く、また文学界で戦没者の鎮魂を願うという初めての試みが『ビルマの豎琴』であった。全体を通してこの本の主題は戦没者の鎮魂であると言える。

私が学校から帰ると、祖父はビルマから共に復員した祖父の友人と縁側でよく話をしていた。祖父の友人はビルマ戦で片足を失っていた。たまたま祖父と祖父の友人の間に葉のは

さまった『ビルマの豎琴』が置かれていることもあった。その背中を見ていると、いつも「ビルマ」「戦争」という2語が思い起こされた。当時はそれを見て「そのままにしておけないこと」をひしひしと感じていた。祖父たちが戦争を体験したという事実を過去のことと終わらせてはいけない。祖父の戦争を後世に伝えなければいけない。そしてそれは私たちの役目であると感じていた。

しかし『ビルマの豎琴』を読み返して、祖父とその友人の考える「そのままにしておけないこと」というのは私の思うそれとは異なることに気がついた。そこにはっきりとした違いがあるからこそ、初めて『ビルマの豎琴』を読んだときに違和感を覚えたのである。私にとっての「そのままにしておけないこと」とは、祖父の体験したことを過去のことと終わらせてしまうことであつたが、祖父にとっての「そのままにしておけないこと」というのはビルマに残してこなければならなかつた戦友達であるのだと気付いた。祖父にとってはこの本の冒頭の「元気よく帰ってきた部隊」というのは他人ではない。片足を失って復員した祖父の友人にとっても同じである。自分たちは復員した。しかし、いったい何人の戦友を置いてこなければならなかつたか。それがビルマ戦で負つた祖父たちの痛みある。

『ビルマの豎琴』がビルマ戦を忠実に表わし、戦争という問題提起を一番のねらいとする内容であつたなら、この本が祖父と祖父の友人の間に置かれることもなかつただろう。大切なことは、「戦争を二度と起こしてはいけない」と後世に伝えるということだけではない。「1945年の夏までに終わってしまった命を悼み、1945年の夏を越えた人々の気持ちを知ろうとする」ということ。これも大切なことである。私は後者よりも専ら戦争の悲惨さを伝えることだけが頭にあつた。それを祖父は『ビルマの豎琴』を通して教えてくれた気がする。

この小説は竹山道雄が深い鎮魂を目的に執筆したものであるが、だからこそそれ以上のものを読み手に伝える。この小説の主人公である「うたう部隊」は3つの役割をもっている。まずは水島が生んだビルマ僧による鎮魂の役割。それから水島が三角山で没するという戦没者としての役割。「うたう部隊」が戦没者である水島をビルマに残したまま復員するという役割である。それから読み終えて『ビルマの豎琴』には祖父の体験した戦争のやりきれなさが刻むように記されているからこそ、祖父はこの本を愛したのだと気づいた。図書館でこの本にもう一度出会つたからこそ気づけたことである。この体験を大切にしたいと感じている。